情報モラル教育　大玉村立大山小学校

キーワード：デジタル・シティズンシップ教育、ふくしま情報モラル診断

Ⅰ　研究について

1　情報モラル教育についての学校課題

本校では ICT 機器を積極的に活用した授業を行っており、児童は日常的にタブレット端末に触れているため、タブレットを操作する技能に優れている。７月に本校で全校生を対象に「ふくしま情報モラル診断」を実施したところ、普段の生活でインターネットを利用している児童は、６０％という結果であった。日常的にインターネットで検索したり、動画を見たりしている児童が多いことが分かる。また、「インターネットでトラブルにあったことはない」と答えた児童は９０％と高い結果であった。しかしながら、情報モラルに関するクイズでは公共的なネットワーク社会の構築の正答率が低く、情報モラルについての正しい知識を身に付けている児童は４９％と低い結果となった。また、「インターネットの使い方について家庭でルールを決めていますか」という質問には「決めていない」と答えた児童が２６％おり、全体の約３割が家庭でのルールがないままインターネットを利用していることが明らかとなった。そこで本校では、「情報機器を使用することのリスクを理解し、行動の善悪を自分で判断することができる力を育む」ために、デジタル・シティズンシップ教育を推進していきたいと考えた。実践授業のほかにも、情報モラル講演会に積極的に参加するなど、情報モラルに関する知識や理解を深めてきた。今後も同地区小中学校で連携した継続的な情報モラル教育の実践を深めていきたい。

2　実践概要（授業実践、研究会等）

時期	実施内容
４月２１日	第１回 校内研修 授業における ICT の活用について（Google Jamboard 等の活用）
６月１４日	玉井小オープンスクール 第２学年 道徳科「みんなのニュースがかり」
	第５学年 道徳科「アップするの？」
７月２７日	おおたま学園全体会 研修会
	「テクノロジーの善き使い手を育てるデジタル・シティズンシップ教育」
	講師　国際大学GLOCOM　准教授・主幹研究員　豊福　晋平　様
１０月２７日	親子情報モラル教室「情報モラルについて考えよう」
	講師　医療創生大学心理学部　教授　中尾　剛　様
１１月１７日	大山小オープンスクール 第３学年２組　道徳科「家のパソコンで」

時期	実施内容
１１月２４日	第１回　校内授業研究会　第５学年１組　学級活動「ネット利用とわたし」
１１月２８日	第２回　校内研修会「授業におけるテキストマイニングの活用について」
１２月　５日	第２回　校内授業研究会　第５学年２組　学級活動「ネット利用とわたし」
１２月１３日	大玉中学校授業研究会　第１学年１組　学級活動 「デジタル世界の歩き方　～ネットワークと道路の共通の原則～」
１２月１５日	第３回　校内授業研究会　第６学年１組　学級活動「ネット利用とわたし」

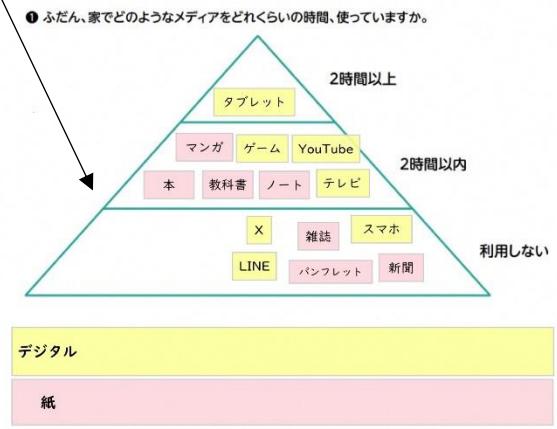
II　研究の実際について

1　校内授業研究会での実践指導

（１）　実践事例１　第５学年２組　学級活動　「ネット利用とわたし」

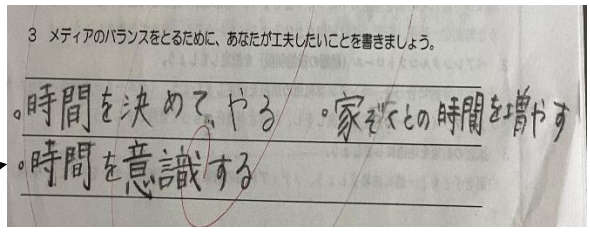
①　情報モラル診断結果を提示する。

ふくしま情報モラル診断の正答率が最も低かった「公共的なネットワークの構築」の結果を掲示することで、インターネットに対する知識が十分でないことを確かめた。その後、ピラミッド型思考ツールに自分のメディア時間を記録したものを再度確認させることで、メディアとの付き合い方を再認識させることができた。

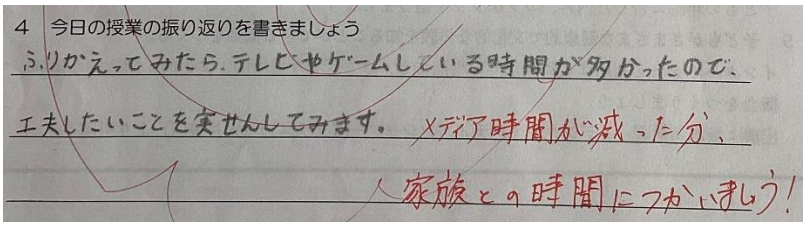


②　メディアバランスを考える。

平日の朝、放課後、休日の３パターンのメディア利用時間を考えさせた。メディアを使わないでよい選択肢があるということも含め説明した。子ども同士でワークシートを見せ合い、メディアの使い方改善の視点を参考に子ども自身に朱書きで修正させ、メディアバランスをとるための工夫点を書くことができた。



③　授業を振り返る児童の感想



（２） 実践事例２　第３学年２組　道徳科　「家のパソコンで」

①　事前アンケートを提示する。

約束やきまりについて本音を引き出すために、事前アンケートの結果を提示し、子ども自身に生活を振り返らせた。子どもの実態に触れながら授業ができた。

②　主人公の気持ちを可視化する。

思考ツールの一つである「心のものさし」を活用し、主人公の気持ちを可視化することで、立場を自分事のように捉え、考えることができた。

③　約束を守るために必要なことを考える。

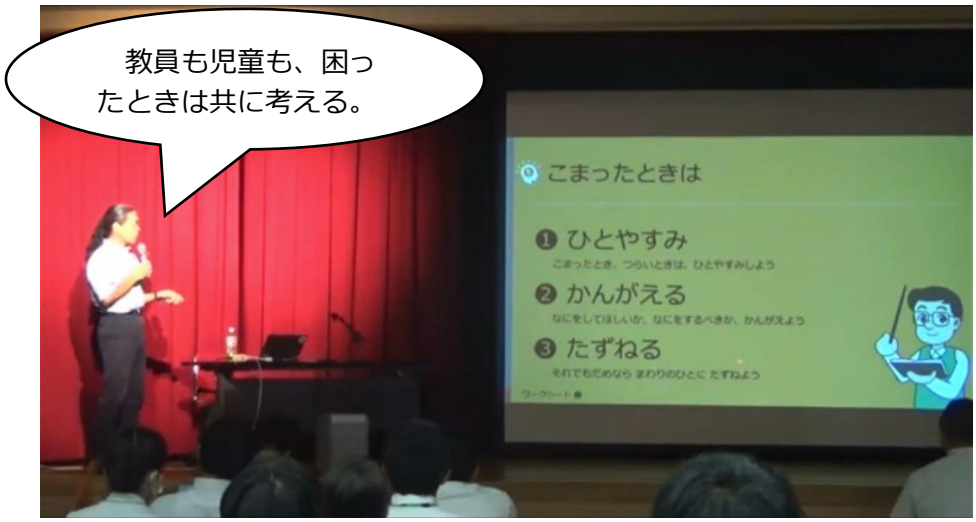
約束やきまりの意義、それらを守るために必要なことをグループで話し合った。導入時に心のものさしで主人公の気持ちになって考えたことをもとに、約束を破り、大変なことになっている主人公の立場に共感させることができた。

また、「パソコンだったからそうなったのか？」「自分の家でやったからそうなったのか？」「自分専用の端末だったら大丈夫なのか？」など、想定される様々な場面を投げかけて考えさせることで、より自分事として捉えさせることができた。

2　情報モラル講演会の様子（おおたま学園全体会にて）

講演名「テクノロジーの善き使い手を育てるデジタル・シティズンシップ教育」

講師　国際大学 GLOCOM　准教授・主幹研究員　豊福　晋平　様



おおたま学園全体会にて、国際大学 GLOCOM の豊福先生にお越しいただき、教職員を対象にデジタル・シティズンシップ教育についての研修を行った。豊福先生からは、デジタル・シティズンシップ教育は保護者と児童がデジタルとの向き合い方を一緒に考えていくことが大切であると学んだ。これからのデジタル社会を生きていくために、教師も学校での日常生活で、児童が SNS やメディアに触れることを否定するのではなく、上手に活用したり、各種メディアに触れる時間を考慮したりしていきながら、メディアとの付き合い方を考えていくことが大事であることを学んだ。デジタル・シティズンシップ教育を必要としているのは子どもだけではなく、大人もデジタルの経験を十分にもたないことから、デジタル・シティズンシップ教育は社会全体に必要とされるものである。これらのことから、テクノロジーのもたらす影響を市民や社会の一員として理解しているとは限らないので、子どもたちはもちろん、社会全体の経験の格差を埋めるには教育的な働きかけが大事であることも学んだ。

III　成果と課題について

1　成果

○　今年度は現職教育でも ICT 機器の活用を推進し、全ての教員が指導できることを目指して、ICT の活用を積極的に推進してきた。その中で、教員全体での**「情報モラル教育の必要性」への意識の高まり**が見られ、その情報は本当なのか、相手を意識して書き込んでいるかといった情報モラル教育が自然と授業の中で行われるなど、様々な場面で実践を重ねることができた。

○　受信者として、**「正しい情報を見極めること」**や、発信者として**「注意しなければならないこと」**を理解することができた。また、発信者となったとき相手への気遣いから、

思いやりの心をもつことの大切さにも気付かせることができた。このことは日常生活の中での人間関係づくりに大いに役立っている。

2　課題

- 様々な教育活動の中で、情報モラル教育を実践し、研究をさらに深めていきたい。
- 講演会、情報モラル診断、個別面談でのメディア使用についての呼びかけ等で保護者の意識も高まりつつあるが、情報モラル教育に対する認識の差はまだまだ大きいため、今後さらに**家庭との連携**を深めていきたい。
- デジタル・シティズンシップ教育を推進した新しい情報モラル教育の実践に向けて、情報を発信したり受信したりする際の**個人の思いや考え、情報の信頼性について**話合いを深める場をさらに設定し、これからのデジタル化社会を生き抜く子どもたちを育んでいきたい。

【引用文献・参考文献・参考 URL】

・　経済産業省.「未来の教室」STEAM ライブラリー.
https://www.steam-library.go.jp/content/132（参照 2024-2-22）

・　坂本旬他(2022).「デジタル・シティズンシップ＋（プラス）」.大月書店.